

第4回 「吃音のつどい」を開催しました

☆座談会☆

●吃音の症状について

- ・母音がことばの始めにくると、吃音が出る。
 - 「おはよう」: 幼稚園バスに乗る時や、朝、先生に挨拶する時など、なかなか言えないので、他の友だちを待たせてしまうことになり、親としては心苦しい。
- ・明るい性格で、お喋りが大好き。園でも家庭でも同じように吃音(連発)が出ているが、本人は悩んでいる様子はなく、周りの子も話し方を含めて本人らしさと思ってきているように思う。(年中)
- ・園では担任としゃべる時だけ出ているらしい。(担任が話したい相手になっているからだと思われる)
- ・語彙が増えて使いこなせるように言語力が上がってくると、少し落ち着いてくるように感じる。伸発が多い。(小2)
- ・家庭ではすごく出するのに、学校など家以外の場面ではほとんど出ない。本人に聞いても、「わざとじゃない。自分のタイミング。」と言っている。(小2)
- ・症状は変化しているが(連発→伸発)、発吃から2年もたつと慣れてきて、吃音に振り回されずに生活できるようになった。(年中)
- ・吃音は日常的にずっと出ており、本にある通りに、連発→伸発→難発と変化してきた。その中で少しの波がある。少しひどい時は、本人もイライラして「なんでしゃべれないんだー!!」と言ったりしている。(小2)
- ・大きな波があり、何か月も全く出ない時があり、治ったのかなあと思っていたが、半年ぐらいたった時にまた出るようになった。そういったことが繰り返されているので、もう治ることはないと思う。うまく付き合っていきたい。

●本人の吃音の自覚について

- ・天真爛漫でお喋り大好き。明るい性格。吃音はよく出る(特に好きなゲームの話をするとうれしくて“吃音祭り”のようにものすごく連発が出る)が、本人は悩んでいる様子はない。また、今のところ周りの子も、それが本児らしさだと思っているようだ。(年中)
- ・ことばがつかえると口を塞いだりして、「言にくい。」と言うことがある。もっとひどくなると、足をバタバタさせてタイミングをつかんでいることもある。(年中)
- ・おとなしい性格もあり、加えて吃音があることで友達との会話のタイミングに入りにくく、聞かれても「わかからない。」と答えていることが多いようで心配。(年中9)
- ・小1だが、クラスに吃音の子がどうやら2人ぐらいいるようで、「あの子と一緒に」と言っている。安心している様子。
- ・小学生にもなると、吃音があることを自覚し、吃音があっても本人的にはしんどさを感じないで楽に話せるようになるが、吃音があることで、他の人とのコミュニケーションで、話すタイミングが遅れてリズムに乗って話せないということに悩むようになった。
- ・症状の波の中で、症状がほとんど出なくなった時があったが、本人はそのことが不自然と感じたようで、「ボク、おかしくなったのかなあ？」と心配そうにしていた。(小2)
- ・小2になりクラスが変わって、困っていることを書くアンケート調査があり、吃音のことを書いたらしい。個人懇談の時に担任からそのことを聞いた。担任は、まだ経験が浅く、吃音のことはあまり知らないが、自分も勉強しながら前向きに対応していきたいという熱意が感じられた。親としては、「遠慮せずガンガン話してもらいたい。」と伝え、担任と

二人で話す機会を持ってもらい、何に困っているのかなどを聞いてくれたようだ。自分からアクションを起こせたこと、担任ときちんと話せたことはとても良かったと感じている。

●子どもに吃音のことをどうやって話していますか？

- ・園の担任から、吃音を友達に真似されていると知り、それまで吃音のことは触れない方がいいと思っていたが、本人に聞いてみたら、「イヤだった。」と答え、自覚していたんだと少し驚いた。その後、本人の調子が悪いと、ひよっとしたらからかわれたりしているのではないかと心配になるが、しょっちゅう本人や園の先生に聞くわけにもいかず、本人と吃音のことをどうやって突っ込んで話したらよいか悩んでいる。(年少)
- ・最初は吃音のことに触れない方がいいと思っていたが、園の先生に相談したところ、吃音の研修(高山久美愛病院の田宮先生の講演)に行かれた先生で、その時の資料をもらい、吃音のことを話してもいいんだという気持ちになったので、本人と話すようになった。吃音のことを話す時は、園の様子を聞くときのついでにさらっと軽い感じで、「最近どう？話しづらい？」と聞いてみたりしている。本人も、「今日はしゃべりづらかった。」とか、「今日は大丈夫だった。」とか普通に言えるようになった。(年長)
- ・まだしっかり自覚がないので、聞いても「わからない。」とかはぐらかしてしまう。一度園の先生が、真似されて嫌な気持ちになったことはなかったか聞いてくれた時に、「いやなことあったけど、友達じゃない。妹。」と答えたことがあった。
- ・年中になって自覚しているようだったので、そろそろ聞いてみようと思い、話してみた。「嫌なことあった？」と聞くとぼつぼつとってくれるようになったので、なるべく話を伸ばしてたくさん聞き出すように試みている。だんだん園での様子を具体的に話してくれるようになった。
- ・小学生男子は、聞いてもあまり話してくれない。聞いても「大丈夫。」の返事。
- ・年長頃にきちんと「吃音」に向き合うようになった。園でも吃音は出ていたが、本人の困り感はなく、担任の先生からは、「特別問題がないのに、あえて吃音の話をするのはどうなのか。」と言われ、その時は、そうかなあと思ったが、その後、吃音のセミナーに参加して、やはりみんなに伝えてもらった方がいいと思い、意を決して先生に「伝えてください！」とお願いしてクラスの子どもたちに吃音の話をしてもらった。本人は、「話してもらってよかった。」と言っており、それを機に、本人と吃音のことをオープンに話せるようになった。「今日どうだった？何が今しゃべりにくいのか？」とか、あえて吃音の話をするようにしている。男子はなかなかしゃべってくれないので、グイグイこっから話すようにしている。調子が悪そうなどときにはあえて話すようにしている。すると、それに慣れて、普通に喋ってくれるようになったし、必要な時は自分でアクションを起こせるようになってきたので、今後は親が出なくても、先生と子どもだけで解決できるようになるといいと思う。今は、普通のことのようにガンガン話している。(小2)

●友達にまねされていることがわかったら・・・

- ・仲のいい友達ほど真似る傾向がある。年長の時に友達に真似されたという訴えがあり、担任の先生に介入してもらい、真似しないように話してもらった。本人が気にしているようだったので、それをプラスにとらえ、「仲がいいから、真似してくれているんだよ。」と伝えたら少し安心したようだった。真似した子からは卒園時に、『仲良くしてくれてありがとう』というメッセージカードをもらった。本当に仲が良かったんだと感じ、プラスに捉えることが大切だと思った。

●園や学校の先生との連携、他の保護者へのカミングアウトについて

- ・不安が強く心配性な性格。クラスの子に「なんでそんな話し方するの？」と言われたと本人からの訴えがあり、担任の先生と相談して、クラスの子どもたちに話してもらった。(年長の6月)クラスの子は優しい子が多く、あとから担

任に「僕もまねしちゃった。」と素直に言いに来た子もいたらしい。それで本人は少し安心し、気分的に楽になり、「ボク、きつおんだよ。」と言えるようになった。(年長)

- ・学校に入ってから、学級懇談会で、他の保護者に吃音があることを話した。話したことで、他の保護者から「何か気を付けた方がいい事ある？」とか、「うちの子も気になるこんなことがあるのよ。」など気にしてもらえ、話さなくてもよかったかとも思ったが、自分の安心感にもなり話してよかったと思う。(小2)
- ・園で吃音が出て、ことばが出てこない時に、担任が「忘れちゃったの？」と言われたと本人からの訴えあり。最後まで話を聞いてもらえなかった対応に疑問あり。本人は、ひどい吃音の症状が出ている時期だったので、止めてくれたのかもしれない。(後日談:その後、園の担任に確認したところ、この件は担任ではない職員の対応であることが判明。他のクラス担任とも吃音の対応については共有していくとのこと)(年中)
- ・年長の時に担任からクラスの子に吃音のことを話してもらった。卒園式ギリギリの時だったが、理解してくれた子たちが一緒に小学校へ上がったので、話してもらえてよかったと思う。
- ・家庭ではすごく症状が出ているのに、学校で全く出ていないので、担任に吃音があることを理解してもらえないので困っている。友達関係の中で出ているかもしれなく、心配。本人はとても心配性で、先生に怒られることを非常に恐れているので、その緊張感から吃音が出ないようだ。吃音は環境との関係もあるように感じる。

●言語通級を利用しています

- ・月1回の頻度で他校の通級指導教室に通っている。治すことが目的ではなく、本人の情緒の安定のために通っている。通級では、言いにくいことばの発音練習を少し、「お話しタイム」で、興味のあることを安心していっぱい喋って、(聞いてもらえるので)本人は楽しく通っている。担任と通級の先生と保護者の3者で連絡ノートをやとりしており、学校での様子がわかって話のタネになる。
- ・さらに、蘇原第一小学校の吃音のグループ指導(1年～6年)にも参加させてもらっている。子どもたちでゲームをしたり、話したりする活動だったが、高学年の子で、自己紹介に3分ぐらいかかるほどの吃音の子がいて衝撃的だったが、その子の保護者の方は、クラスみんなはもう慣れて、どんなに吃音があっても聞いてくれるので、安心してるとおっしゃっていた。

●学校で、国語の音読や意見を発表する時はどうしているの？

- ・学校では、人の話は最後まで聴こうと言うことが大前提になっているので、いくらつかえていても安心して話せる環境になっている。
- ・そもそも、学校には、吃音以外でも、声の小さい子や話し方に癖のある子などがいろいろいて、おまけにマスクをしているので、吃音があっても目立たない。

●子ども同士のからかいなどに大人がどこまで介入したらよいか

- ・とても仲良しな子に真似され、自分で「わざとじゃないから真似しないで」と言ったのに、真似がなくなり、親に訴えてきたので先生に相談したところ、すぐに介入され、話して下さり、真似はなくなったが、二人に壁ができてしまい、その後遊べなくなってしまった。
- ・吃音以外のことで、仲良しの近所の子に棒で叩かれることが続き、その保護者に話したら、それから遊ばなくなってしまった。
→大人がどこまで介入したらよいか悩む。その後どう修復できるのか…。もう少し大きくなれば、子ども同士で解決できるようになってほしいな。などの意見が出ました。